

## 特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり

### ○特別支援教育＝「個別の支援」？

平成19年4月「特別支援教育」が学校教育法に位置付けられました。このことにより、全ての学校において、特別な支援を必要とする幼児児童生徒に対して、特別支援教育が実施されることになりました。この5年間、小・中学校及び高等学校では、通常の学級における特別支援教育の充実を求められてきたこととなります。

通常の学級では、まず、特別な支援を必要とする児童生徒への「個別の支援」に着目し、様々な取組を行うことからスタートしてきたと考えます。

では、通常の学級における特別支援教育とは、「個別の支援」のみを言うのでしょうか？



### ○特別支援教育の視点で通常の学級の授業づくりを再考する

発達障害等の児童生徒も含めた通常の学級の授業づくりを考える時、「個別の支援」だけではなく、全ての児童生徒の教育の基本となる教科教育そのものの充実が望まれます。

通常の学級では、従来から教科教育において、分かりやすい授業を目指して、授業構成や発問指示、板書、学習形態など教材研究を深め、様々な指導の工夫が行われてきました。また、発達障害等の児童生徒には、通級指導教室<sup>\*1</sup>や特別支援学級で行われている障害の特性に応じた配慮や支援も必要となります。このような指導の工夫や配慮・支援を特別支援教育の視点として押さえ、その視点による通常の学級の授業づくりの再考を試みました。

(図1)

特別支援教育が推進されている今、通常の学級の授業に特別支援教育の視点を取り入れ、再度見直しを図ることは、より質の高い授業へと改善できるチャンスであるとも言えます。

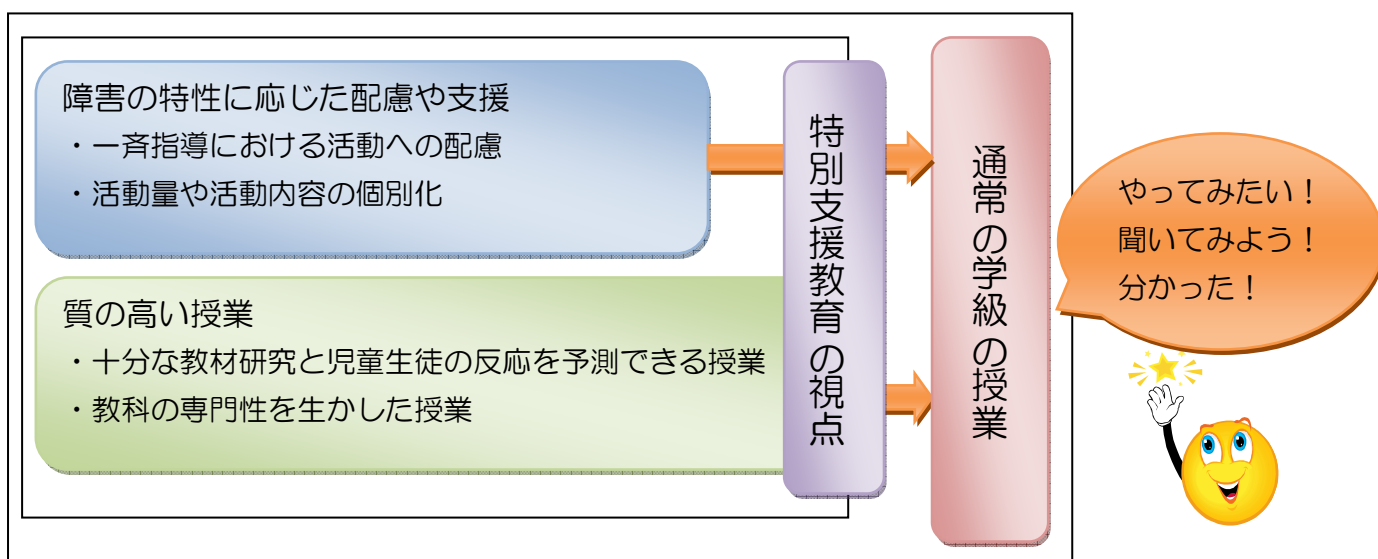


図1 特別支援教育の視点による通常の学級の授業の再考

### ○特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくりとは

通常の学級の授業づくりにおいて、十分な教材研究を行い、様々な指導の工夫や手立てを行うことにより、児童生徒の理解がより深まる授業が実現します。まずはこの指導の工夫が基本となります。しかし、指導の工夫だけでは理解することに困難を抱えている発達障害等の児童生徒もいます。その場合に、授業の中にその児童生徒への個に応じた配慮・支援を行う必要があります、その配慮・支援について事前に想定し、手立てを考えておかなければなりません。このように、発達障害等の児童生徒も含め、どの子どもも分かる授業づくりは、様々な指導の工夫の上に、発達障害等の児童生徒への個に応じた配慮・支援も行われているものです。（廣瀬氏は、指導の工夫をユニバーサルの対応、個への配慮をバリアフリー的対応として示しています）。

さらに、どの子どもにも分かる授業づくりには、一人一人の子どもを大切にしている校内支援体制の構築や学級経営の取組が土台としてあり、特別支援学校や医療等専門機関とのつながりによって支えられるものであると考えます。

以上のような考えが、「特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり」の目指すところです。

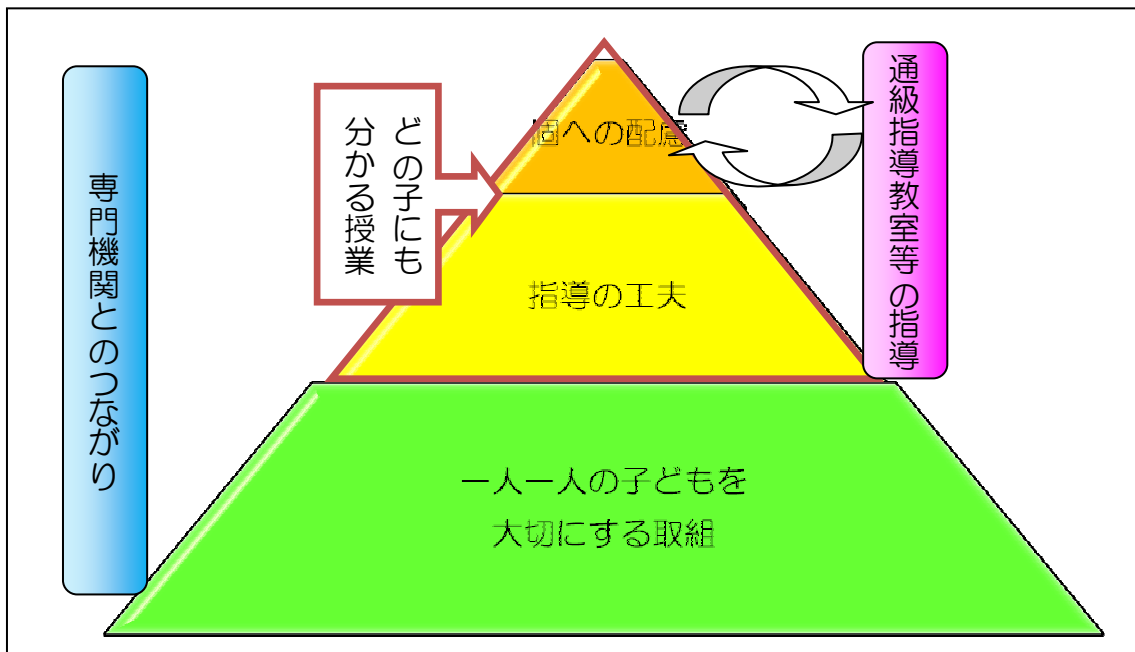


図2 「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」のイメージ

### ○取組の概要

「特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり」では、廣瀬氏の提言（図3）をもとに、県内全てのLD等通級指導教室設置校において、通常の学級担任と通級指導教室担当者が連携し、以下のような取組を行いました。

①通常の学級では、通級する児童生徒が自己肯定感を感じられる学級経営や集団づくりを行う。また、授業における指導の工夫、個への配慮等を行い、分かる楽しさを味わうことのできる授業づくりにより、多くの児童生徒にも効果を生む授業改善を行う。

②通級指導教室では、発達障害等のある児童生徒の課題を見極め、特性に応じた指導とともに在籍する通常の学級に活用できる指導を行う。

(冊子 ページ 発達障害等の児童生徒の自立活動の指導について 参照)

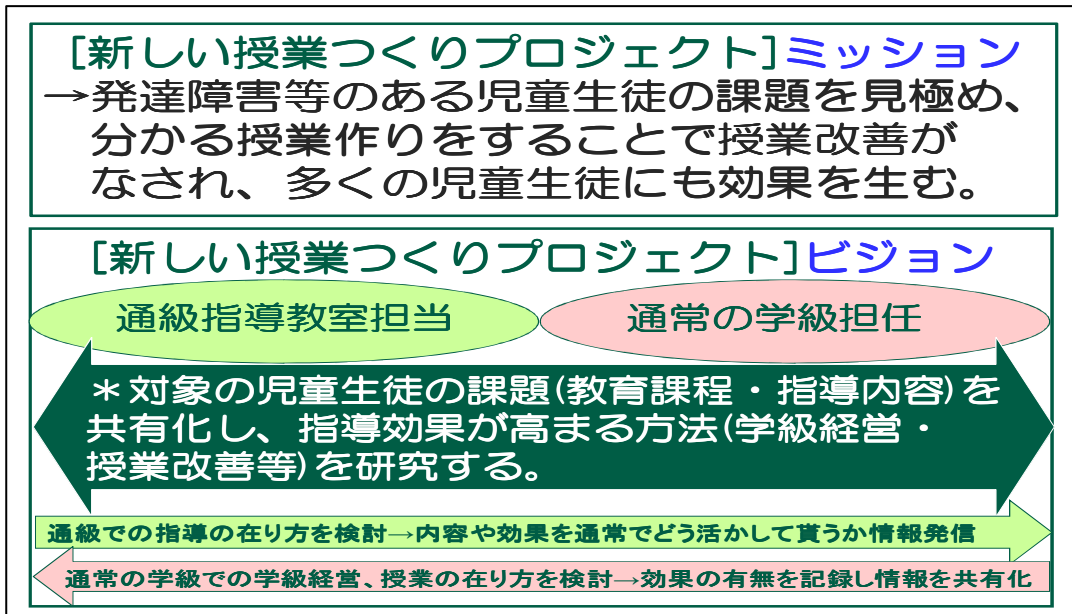


図3 平成23年5月20日第一回新しい授業づくり委員会

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員 廣瀬由美子氏講演資料

## ○本冊子の構成について

本冊子は、特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくりのイメージをもとに、「どの子にも分かる授業づくり」「授業例」「一人一人の子どもを大切にする取組」「特別支援教育はつながる教育」「研究授業を授業改善に生かすために」という5つの内容で構成しています。



「どの子にも分かる授業づくり」では、学習環境や授業の構成、教材教具の工夫など、取組例を載せています。

「授業例」では、実際に取り組んだ授業の指導案や指導計画を載せ、工夫や配慮のポイントを紹介しています。

「一人一人の子どもを大切にする取組」では、日々の授業実践を支える土台作りとして、校内支援体制、学級・学校全体での取組例を紹介しています。

「特別支援教育はつながる教育」では、通級指導教室担当と通常の学級担任の連携や、外部専門機関の活用・連携の効果について説明しています。

「研究授業を授業改善に生かすために」では、研究授業・研究協議による授業改善について、筑波大学附属小学校 桂 聖 教諭の模範授業とともに、岩出市立中央小学校での取組をまとめています。

冊子後半に廣瀬氏の寄稿「教科教育、特別支援教育、ともに授業力を高める」と、研究協力校の先生方の感想をコラムにして掲載し、まとめとしました。